

ムーンメモリア・ロストノイズ  
十話…この地に息づくもの

雨和七瀬

セヌイ村を離れてしばらく歩いた頃。

「ミナートの町ってどんな場所なんですか？」

ブランカは両隣で歩くユノとルークを交互に見る。先に口を開いたのはユノだった。

「商売の町だな。国中の品物を集めて他の国へ運んだり、他の国のものが集まったり。下手したら王都より良いもん買えるな」

「銃の弾も売ってたら良いなー」と続け、ルークに視線で圧をかけるユノをよそに、ルークもブランカに語り掛ける。

「要するに貿易の中継地点で、この国で買える品物ほぼ全てが集まる町だ。それもあって、この国では珍しく多くの種族が集まっている」

「しゅぞく」

ブランカは聞きなれない言葉をそのまま返す。

「そうか、知らないか。……知性をもって文化的な暮らしをする種族は俺たちのような素種と、特別な外見をした特種が居る。特種の中には獣の姿に似た獣人や、魔力で肉体を構成する魔人、と、お前が知らずに見たら驚く

ような者もいるが、同盟を結んだ『人間』であることに変わりはない」

ルークが一息つくと、ユノが自身を指さした。

「オレのじいちゃん、鳥人なんだぜ」

「ええっ！ でもユノさん、鳥っぽくない……」

ブランカはユノを周りからあちこち見るが、ブランカは「うーん……」と唸るばかりだった。その様子を見て、ユノは答えを教えるように髪を手で上げた。すると、首の後ろに数枚の羽が首を守るように生えていた。

「す、すごい！」

ブランカは目を輝かせて羽を見つめる。ルークもそれをしめじみと眺めていた。

「懐かしいだろ、ルーク」

ユノがにやにやしながらルークを覗き見るが、ルークは咳払いをして目を逸らした。

「……大陸全体で見れば、混血は珍しくもなんともない」

「ちえー、昔は驚いてくれたのに」

ルークの冷めた反応に、ユノは口を尖らせながら髪を戻した。そして改めてブランカの目を見た。

「町に着けばもつと……魔物と似た見た目の奴も居る。

見たことないなら『怖がるな』とは言えないけどさ、気にしないでやってくれよな」

ユノは笑ったが、いつもよりも静かなものだった。

「魔物と……わかりました」

ブランカもその様子を見て、力強く頷いた。

夕方になると一行は歩みを止め、野宮の準備を始めた。ルークは紐で繋がれた杭を取り出し、順番通りに地面へと打ち込んでいく。ブランカは残っている杭を持って歩いて行く。

「魔物除けになるんでしたっけ？」

ルークは「ああ」と簡潔に返す。ユノは慣れた手つきで永遠灯火の明かりを点けつつ、ルークに問いかける。

「この辺じゃ魔物はそうそう出ないだろ、意味あんのか？」

ルークは少し考えつつも、杭を打つ手を止めない。

「魔物は傾向こそあるものの、いっどこに出るか予測もできないことで恐怖の対象となってきた。意味がないということはない」

ルークが立ち上がると、ブランカは次の杭を差し出した。ルークはそれを持って数歩歩くとまたしゃがみ、杭を地面に突き刺した。

『夜は空に浮かぶ月が世界を見つめ、罪を咎める』……信心深い者はそう言うが、魔除けの陣の組み方がここまですれ洗練されている以上、信憑性なんて無いに等しい』

カン、と杭と石が立てる音が響く。ブランカは空を見上げた。紺色が混ざり始めた空に、三日月が高くに見えた。

「月が見てる……へえ」

ブランカは月をじつと眺める。火を起こし終えたユノも、ブランカの隣に立って同じように月を見る。

「そうだ、だから夜も悪いことはしちやダメだ……なんて、小さい頃よく言われてたなあ」

ルークはブランカが持っていた杭を一つ手に取り、またしゃがんだ。

天幕まで張り終わるとルークは鞆から塩漬け肉を取り出し、指の太さほどの厚さで切り分け始めた。

「……あのさあルーク、もつと薄く切れって」

ユノに指摘されて塩漬け肉を食べる時の大きさを思い出す。やはりこの厚さばかりが思い出された。

「いつもこれくらいじゃないか？」

「分かった、オレがやる」

ユノはルークから半ば強引に塩漬け肉とナイフを取り上げ、薄く切っては自分で食べたり、ブランカやルークに手渡した。

「分厚いとだめなんですか？」

ブランカの純粹な疑問に、ユノは口を尖らせながら答える。

「オレだって分厚く贅沢に食べてえけど、部隊に居た頃散々言われたんだ、『肉は薄く切れ』って。長持ちするし、平等に分けられるし、すぐ食い終わる」

「そうか……」

ルークは塩漬け肉の薄切りを四つ折りにして口に入れる。塩辛さが舌を痛いくらいに刺激した。

「肉はとにかく貴重なんだ。帝国では魔物の肉まで食ってるって言うし」

ユノは最後の一切れを口に放り込み、いつの間にか取り出して酒で流し込む。

「……言動が一致していないような」

ブランカは話を聞きつつ一口で食べる大きさを小さくしていたのが馬鹿らしくなり、残りを口に詰め込んだ。

「……おみずくらしい」

ブランカが水の入った瓶に手を伸ばすのを見て、ルークは先程のユノの言葉に納得した。

ユノとブランカが寝たことで静まり返った天幕の外で、ルークは夜風に吹かれながら、夜の街道を眺めていた。街道の先には星が集ったようなミナートの灯りがちらついていた。

ルークが空を見上げて月はどこにも見えない。主な星々が広がるのみであった。

——草を踏む音。ルークは手に持っていた剣の柄を握り、耳を澄ませる。四つ足、左後方、息を潜めている。(魔物は杭の結界の中には入れない。それを理解しているようだ)

振り向けば一度は退散するだろう。だが朝、杭を抜く瞬間に襲い掛かるだろう。徒党を組むかもしれない。

ルークは前方へと歩く。天幕の横を通り、自分以外の足音が聞こえたのを確認して、一步杭の外へと踏み出す。しかし何も起きない。ルークは次の一步で左を向くと同時に剣を抜き、強く握りしめることで魔力を込めて構えた。

予想通り飛び掛かってきた魔物が目を見開き、逃げようと空中で体勢を変えようとしていた。ルークは一步踏み出して腰を下げ、魔物の首に刃を当てた。魔物の毛に切先が触れる。当然、襲撃者は頭を上げて逃れようとするが、ルークが柄を強く握ると魔物は刃へと引き寄せられ、抵抗も虚しいものとなる。

ルークはそのまま剣を振り上げる。魔物は二度と喉を震わせることは叶わなかった。焦燥の色を残した魔物の首がルークの背後に落ちた音が、断末魔の代わりであった。

ルークは天幕を汚さないように慎重に入り、鞆の中から布巾を取り出す。そっと後ずさって出ると、剣に付い

た血を拭う。何度か擦ると刃の曇りが取れ、自身の顔が映り込んだ。

(髪にまでかかったか、面倒だな)

ルークは随分と黒さが増した髪に触れ、指に付いた汚れを布巾に擦り付けた。剣を鞘にしまうと、ルークは地面に落ちている棒を拾い、簡単な魔法陣を描いた。

(これなら『調節』も簡単で、二人を起こすこともない)

最後に陣の中に立ち、指で線に触れた。すると霧が彼の周りを漂い、魔物の血だけでなく砂粒、土、皮脂などを巻き込んで水の塊となり、足元へと落ちていく。

霧が全て消えたのを確認して、ルークは足で魔法陣を消した。少し濡れた地面は、魔法の跡などを一切残さなかった。

ふと顔を上げると、そこには寝相の悪さのせいで髪がぼさぼさになったユノが立っていた。

「まあ一人で魔物と戦ってら。何度も言うけど、オレを呼べって」

ユノはルークに指をトントンと突きつけるものの、いつものように何も言わないでいるルークを見て、ため息を吐いた。

「はあ……、まあ相手はオオネコだし？ 一人でやれるって判断も間違っちゃねえけど」

その後を、ユノはいつも言わない。互いに分かっているのだ。

「無駄撃ちを減らすためだ」

これも、いつもの答えだ。しかし今日は付け加えるべき言葉があった。

「それに……銃なんか撃ったら、ブランカが起きるだろう」

ユノの視線を感じる。ルークには、見なくても分かった。ユノがふふ、と笑っているのが聞こえた。

「そうだな、野営だって言うのに、あんなに気持ちよさそうに寝るんだもんな」

ルークは天幕の隙間を覗く。その先には、いつものように丸まって眠るブランカの姿があった。

「交代しようぜ、ルークも体を休ませろよ」

ユノは腰に下げていた剣をポン、と叩き、ルークを天幕の中へと押した。

「必要ない……おい」

しかしこうなってしまうとユノは意地でも譲らない。ルークはなるべく端の方で横になった。背後からブランカの寝息が聞こえてくる。目を閉じて肩の力を抜いても、その音がどうしても瞼の裏に景色を形作り、意識を暗闇に落とすことができない。

(……あれから十年経ったのか)

ルークは博識だった『友人』を思い出す。学院を離れてから今はどこで何をしているのか、まるで見当もつかない。どこまでも自由だった彼を思い起こす。小柄だっ

た彼が今どんな姿をしているかは想像できないが、どこかで会えばきっとこんなことを言うのだろう。

『旅かあ。良いね、僕も行くのかな』

(ああ、本当に言いそうだ)

もしくは、こうかも知れない。

『旅ってやっぱり良いよね。僕も旅してるんだ』

(物知りさを活かして冒険者になってもおかしくないな)

『魔物の生息域が変わる？へえ、面白いね』

そして別れ際、きつと笑ってこう言うのだ。

『君の旅に幸あらんことを！』

「ルークさん、朝ですよ」

いつの間にか眠っていたルークは、気が付けば小さな手に押されて揺れていた。

「んん……」

ルークが目を開けると、目の前にブランカの顔があった。目が合うと、ブランカはニコリと笑いかけた。

「ルークさん、寝ながら微笑んでましたけど、良い夢見たんですか？」

ルークは自分の頬に手を当て、緩んでいたのを引き締めた。

「……朝食にしよう」

ルークは顔が赤くなる前に急いで起き上がり、ブランカを置いて天幕をくぐり出た。

〈十一話へ続く〉